

秀吉感嘆一。少幸もありつるある。渠と自方小招きあり。大張
功名と勸めんふ。吁惜や吁惜や。霎時の感とてやまうける。堀尾
親子へとも既ふ。意の隨の擧あり。斯くも敵も怖やまうる退返
さるやと自兵と脱と脱るふ五十騎斗ぞ残される。然とも父子
淡流も負む。其の牽退よと。一呼下辞あり。柴田池田が隊伍と
斬接しむ城中に馳投しむ。柴田の頻ふ下知と傳へ。隙間より
跡と趁蒐。若うとつけて城と捕網。鳥銃と打発し。嚴く攻る
さすをり。日色西山ふ淪むととも。進軍はひととも怠らむ。攻着る
と早騎急あり。城中にもすく防ぐむと。存騷動を機會の
ら夏の常機の坤風。颯と一陣吹起るふ。時とて来れと木下
秀吉。預て準備とあり。岩倉山の絶頂あり。柴草薪

のそのうへ。雄黄硝磺と燧掛快より待てる。猝に。一時ふ火と
懸焼起るふ。時と計し。申の下刻。西南の風ふつれ。焔烟天と
覆をせ。直地ふ城中へ吹却を。若うとこれと烈しく焼べ。直ふ
城と灰燼とら。めんを。易うりけれとも。茲ふ腹策と貯へられむ。
秀吉下知し。焚草ふ。水と灌がせしむ。只烟の吹懸て。
城中のまど火のつらむ。然とも城兵慌忙。逃んとされとも。前面
へ。進兵嚴く。十重廿重又井上へ猛火あせ。今も城と
焼陷さん。その所觀ふ老幼女子。泣叫ぶ声へ宛ふ。今生くらある
阿鼻叫喚も。斯や在らんと。僉借ふ懼怖て途と失ひ。いふせん
と。機會うら。柴田暗号の炮と響うせ。岩倉山の烟と鎮め。
若うと城中へ使者と遣し。言贈るに。状へ名くら馬の道を

豊臣巴の編巻一六六